

〔研究ノート〕

旧約聖書における自由

——エーリッヒ・フロムを中心として——

滝澤 武人

1. はじめに

本稿は、桃山学院大学総合研究所の共同研究プロジェクト「〈建学の精神〉の哲学的・神学的再考」における発表（2015年1月20日）をもととしている。主としてエーリッヒ・フロムの所説を紹介しながら、「自由」という新しい視点から『旧約聖書』（ユダヤ教の『聖書』）のテキストを読みなおしてみようとする試みである。はたしてそれはどこまで可能なのであろうか。

桃山学院の「建学の精神」は「キリスト教精神」であり、それは「自由と愛の精神」と説明されている。大学の社会的責任をはたすためには、大学構成員がそれぞれの場において、「自由と愛の精神」をさらに追究し共有化していく努力が必要であろう。なお、拙稿「新約聖書における自由」（『桃山学院大学キリスト教論集』第23号、1987年）をも参照願いたい。

「自由」はもともときわめてギリシア的・ヘレニズム的な概念であり、「ポリス」にその源流を発している。プラトンは「自由、友愛、知性」をポリスにとって必要不可欠のものと考え、アリストテレスもまたポリスを「自由人の共同体」と呼んでいる。それはヘレニズムのキュニコス・ストア派に引き継がれ、パウロはこの概念によって自らの信仰の根本を説明している。「自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださった」（ガラテヤ書5

キーワード：旧約聖書、自由、エーリッヒ・フロム

章1節)、「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい」(ガラテヤ書5章13節)、「わたしは自由な者ではないか」(コリント前書9章1節)、「神の子供たちの栄光に輝く自由」(ローマ書8章21節)などという言葉には、パウロ自身の高鳴る心臓の鼓動を聴くことができる。その後のキリスト教においても、「自由」はアウグスチヌス、ルター、バルトなどに引き継がれ、現代にいたるまでキリスト教の基本思想となっている。

これに対して、いわゆるヘブライズムの伝統の中から生みだされた旧約聖書には、ヘレニズム的自由が直接的に言及されることはほとんどないと言わざるをえない。しかしながら、旧約聖書の根底には一貫して「自由」を求め、その精神がみなぎっているように思われる。たとえば、モーセを指導者として実現されたあの「エジプト脱出」の物語は、旧約聖書全体を貫くもっとも重要な中心テーマであり、まぎれもなくきわめて歴史的・具体的な「自由・解放」のメッセージとして読まれなければならないであろう。モーセについては、本稿の最後でまとめて論ずる。ここでは、モーセ以前の「創世記」の物語を「自由」という視点から読みなおすことから始めたい。

もちろん、『旧約聖書』はユダヤ教とキリスト教の「聖書」であるが、学問的研究においてはむしろ「世界の古典」「人類の知的遺産」として、「歴史・文学・思想」などの研究対象として扱われるべきものであろう。そのような方法に基づく研究を通して、「自由と愛の精神」は輝きを取りもどすことが可能となるであろう。

以下の論考は、関根正雄の下記の諸著作を土台としている。関根正雄氏(1912-2000年)は、旧約聖書を一貫して文化史・文学史・思想史として追究してこられた。すでに岩波文庫で旧約聖書の全文書をヘブライ語原典から学問的に翻訳・註釈するという偉業を達成され、2000頁近い大冊の『旧約聖書』(教文館、1997年)としてまとめられている。また、『関根正雄著作集(全20巻)』(新地書房、1979~1989年)がある。

『イスラエル宗教文化史』(岩波全書、1952年)

『旧約聖書文学史』（岩波全書，上1978年・下1980年）

『古代イスラエルの思想家』（講談社，「人類の知的遺産」1，1982年）

聖書テキストの引用は『新共同訳聖書』（2006年版）を用いた。旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書1律法』（岩波書店，2004年）をも参照した。

2. フロムの経歴

最初に、エーリッヒ・フロム（1900–1980年）の経歴をかたんにたどっておきたい（深井智朗監修『ティリッヒとフランクフルト学派』法政大学出版会，2014年参照）。両親はフランクフルトの厳格な正統派ユダヤ教徒である。ハイデルベルク大学のアルフレッド・ウェーバー（マックス・ウェーバーの弟）、ヤスパース，リッケルトら錚々たる教授陣のもとで哲学・社会学・心理学を学び，1925年に博士論文「ユダヤ教の戒律—ディアスポラ・ユダヤ教の社会学」を完成し学位を取得している。

その後，フランクフルトの「自由ユダヤ学院」でショーレムやローゼンツヴァイクらから本格的にユダヤ教学を学ぶ中で，フロムは次第に「ハシディズム」（伝統的ユダヤ教の敬虔主義運動）からの転換をはかるようになる。フロイトの精神分析学やマルクス主義に強い関心をいだくようになったのもこの時代である。

1929年にフランクフルト精神分析研究所の所員（やがて社会研究所・社会心理学部門の責任者）となり，ホルクハイマー，アドルノ，ベンヤミン，マルクーゼ，ティリッヒなど，いわゆる「フランクフルト学派」との交友を深める。そして，ナチス政権誕生後の1934年にアメリカに亡命。独自の精神分析学を土台として，さまざまなジャンルで精力的な執筆活動を展開し，最後はスイスの自宅で息をひきとった。

桃山学院の「自由と愛の精神」というテーマに関しても，フロムは世界的ベストセラーとなった次のような名著を残している。原著出版順にあげておこう。

『自由からの逃走』（日高六郎訳，創元社，1951年；原著1941年）

『人間における自由』（谷口隆之助訳，東京創元社，1952年；原著1947年）

『愛するということ』（懸田克躬訳，紀伊國屋書店，1959年；鈴木晶改訳，同書店，1991年；原著1956年）

『自由であるということ—旧約聖書を読む』（飯坂良明訳，河出書房新社，2010年，旧訳『ユダヤ教の人間観』の改題版；原著1966年）

最後に記した『自由であるということ』がこれから紹介する書物である。以下，フロムの引用はすべてこの書物からであり，頁数のみを記しておいた。すでに半世紀前の出版だが，人間の「自由と独立」という視点から旧約聖書全体をとらえようとする試みは，今日においてもきわめて新鮮であり，刺激的な問題提起に満ちている。改題版の帯に付されているように，「旧約聖書とユダヤ教に徹底したヒューマニズムの種子を見出し，人間にとって真の自由とは何かを問う名著」であるといえよう。原著名は“You Shall Be As Gods”（汝ら神のごとくなるべし）であり，エデンの園で蛇が女に語りかける創世記3章5節の言葉である。精神分析学者フロムでなければ，決してつけられないようなたいへん魅力的な書名である。

副題は「旧約聖書およびその伝統の革新的解釈」とされているが，「革新的」（ラディカル）という言葉は「根本的・徹底的」という意味をも有している。ここには，ユダヤ教徒として厳格に教育され，やがて伝統的ユダヤ教から離れながらも，ユダヤ教を土台にして独自の思想を築きあげていったフロムの，並々ならぬ自信のほどがうかがわれる。次の言葉も，そのような自信を示すものであろう。

私は聖書に関する学問領域の専門家ではないけれども，子供の頃からずっと旧約やタルムードを学んだ関係上，本書は多年の省察の結実である。（18頁）

3. 徹底したヒューマニズム

フロムは、ユダヤ教ヒューマニズムを代表する偉大な学者たちから教えを受けていた。中でも「19世紀で最も重要なユダヤ人哲学者」と称せられていた、ヘルマン・コーエンの『理性の宗教』（原著1915年）から強い影響を受けていることを告白する。

もちろん私は、信仰をもっているユダヤ教徒ではないので、これらの人々とは全く違った立場にある。……しかし、私の見解は彼らの教えから成長したものであるし、いかなる点でも、彼らの教えと私の見解との間に断絶があるとは私は思っていない。さらにまた私は、偉大なカント学者、ヘルマン・コーエンの業績によって本書の執筆をいたく励まされた。(19頁)

コーエンは、現代のユダヤ教思想家たちにも、きわめて多くの影響を与えている。たとえば、ピエール・ブーレッツ『20世紀ユダヤ思想家（全3巻）』（合田・柿並・渡名喜・藤岡・三浦訳、みすず書房、1911～1913年）は、第1章「ヘルマン・コーエンのユダヤ教—成年者の宗教」から始まり、ローゼンツヴァイク、ベンヤミン、ショーレム、ブーバー、プロッホ、シュトラウス、ヨナス、レヴィナスの9章から構成されている。

フロムも、どこまでも「理性」によって旧約聖書を学問的に探求しようとしており、自らの立場を「徹底したヒューマニズム」(Radical Humanism)と宣言する。フロム自身に語ってもらった方がよいであろう。なお、「予言者」は「預言者」と変更して引用する。

本書にあらわれた聖書解釈は、徹底したヒューマニズムの解釈である。徹底したヒューマニズムとは、人類の一体性、自己の能力を開発し、内面的調和と世界平和の樹立に到達する人間の可能性を強調する全世

界的な一の哲学をいうのである。徹底したヒューマニズムは、人間の目標を完全な独立においてみる。それは、虚構や幻想をつき破って十分な現実認識に到達することを意味する。(19頁)

徹底したヒューマニズムの種子を聖書の古い始源に求めうるとなすのは、われわれが、預言者アモス、ソクラテス、ルネッサンスの人文主義者、啓蒙主義者、カント、ヘルダー、レッシング、ゲーテ、マルクス、シュバイツァーなどにあらわれた根本的なヒューマニズムを知っているからである。花によって種子ははっきりと認識できる。……徹底したヒューマニズム思想が、聖書と聖書に続く伝統の中の主要な動向だとすれば、ユダヤ人の歴史を通じて、こうしたヒューマニズムの傾向を生み、かつ助長した基本的条件が存在したと見なければならぬ。

(20頁)

4. 自由

フロムは、このような「徹底したヒューマニズム」に基づき、旧約聖書全体を「自由」という言葉から説明しようとする。もちろん、自らの著書『自由からの逃走』と『人間における自由』における現代社会に生きる人間の分析を前提としており、それを旧約聖書に結びつけようとしているのである。ここでも、旧約聖書に関するフロム自身の考えをいくつか引用しておこう。これらの章句において、フロムは旧約聖書の根底をはっきりと「自由」に定めている。

旧約聖書は、多彩な書物であって、1000年のあいだに記され、編集され、さらに編集し直されてでき上がったものであり、原始的な権威主義や部族主義から、人間の根本的な自由や四海同胞の観念にいたるまで、おどろくべき発展をその中に蔵している。旧約聖書はまさに革命的な書

旧約聖書における自由

物である。その中心主題は、血と地につながれた近親相姦的紐帯から人間を解放し、また偶像崇拜、奴隸制、権力などからも人間を解放して、個人と民族とそして人類全体に自由をえさせることにある。(11頁)

聖書は私にとっては、まれに見る書物であり、幾千年にもわたって妥当性をもちつづけてきた多くの規範や原理を表明している。聖書は人々に一つのまぼろしをはっきりと宣言したが、それは今なお有効であり、かつその実現は待望されている。それは一人の人によって書かれたものでもなければ、神によって口述されたものでもない。それは幾世代にもわたって生と自由のために闘った民族の精神を表明するものである。(12頁)

人間の進化とは一体いかなる性質をもつものであろうか。その要点は、人間が血と地につながれた近親相姦的な束縛をふり切って独立と自由へと到達することにある。自然の奴隸たる人間は、人間性を十分に発達させることによって自由となる。聖書およびそれ以後のユダヤ教の見方では、自由と独立が、人間の発達の目標であり、さらにまた、人間の行動の目的は、人間を過去や、自然や、部族や、偶像にしばりつけるくびきやかせからたえず自己を解放して行くということにある。

(94頁)

5. 天地創造

旧約聖書はどこまでも「歴史」にこだわり、「人間」にこだわっている。「神」は具体的・現実的な「歴史に働く神」であり、歴史の中に生きる人間に働きかける神である(たとえば、G. E. ライト『歴史に働く神』新屋徳治訳、日本基督教団出版部、1963年)。では、旧約聖書ははたしてどこまで人間の「自由」形成の歴史と呼ぶるのであろうか。

確かに、あのモーセを指導者とする「出エジプト」の物語は、まさに奴隷状態からの「自由・解放」を求めるきわめて象徴的な出来事であったといえよう。それは紀元前13世紀のエジプト王ラメセス2世の時代の中に歴史的に位置づけられる。しかしながら、それ以前の「創世記」についてはどうであろうか。そこに登場する人間たちの物語を、「自由」という視点から理解することは、はたしてどこまで可能なのであろうか。

創世記の冒頭には、「天地創造」と「エデンの園」という、人間の根底にかかわるきわめて興味深い二つの物語が置かれている。文書として成立した時代も状況も思想もまったく異なる。前者は前6世紀のバビロン捕囚以降の時代、逆に後者はもっと古く前10世紀の古代イスラエル王国の時代にまでさかのぼるであろう。

「天地創造」物語（創世記1章1節－2章4節前半）は、文字通り「神」による天地・動植物・人間の創造物語である。「人間」の創造の場面は次のように報告されている。

神は言われた。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

神は言われた。

「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。」

（創世記1章26－29節）

神によって創造された天地万物は、秩序と調和に満ち、美しく素晴らしいものである。「それは極めて良かった」(31節)のである。ここにはきわめて楽天的で明るい希望が満ちあふれている。しかしながら、神の側に全権が委ねられており、人間は神からの命令を受け取るだけである。神の「似姿」として創造され、神によって祝福されている人間がはたす役割は、次のようなものになるであろう。すなわち、神によって創造され祝福された「動物」(20-22節)を、神の創造の業を受け継ぎつつ、神がなしたように支配することである。そして、植物のみが人間の「食べ物」となる(29節)。なお、日本語の「支配」という言葉がもたらすであろう、自然や環境に関する問題についてここでは言及しない。本頁の下に引用した2章15節をも参照!

この「天地創造」の物語には人間の自由はない。フロムもこのテキストについてほとんど語らない。神は絶対的支配者であり、人間には神から与えられた(委託された)役割があり、それを果たすことを神から求められている。しかしながら、神の似姿として創造された人間には、「自由」がすでに与えられ委ねられている。そして、それを果たすことも果たさないことも人間の自由なのである。いわばそれは旧約聖書における自由の「序曲」として位置づけられよう。

6. エデンの園

人間の「自由」への最初の決断は、「エデンの園」の物語(2章4節後半-3章24節)で展開されている。

主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

(創世記2章15-17節)

……

蛇は女に言った。

「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神は御存じなのだ。」

女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。(創世記3章4-6節)

……

主なる神は言われた。

「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」

主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。(創世記3章22-23節)

人間は神のように「善悪を知る者」となった。人間が「永遠に生きる者」となることをおそれた神は、アダムをエデンの園から追放する(24節)。だがフロムはこれをキリスト教的な「墮罪」とは考えず、むしろ絶対的な神に対する人間の正当な「反逆」「挑戦」であり、「歴史の始まり」「自由の始まり」と考えている。アダムとエバには「皮の衣」が贈られている(3章21節)。すなわち、神が人間を保護しているのである。

人間は神の優越した権力に服さなければならないが、しかし後悔やごんげを示してはいない。エデンの園から追放された人間は独立の生活を始める。人間の最初の反逆行為は人間の歴史の始まりである。というのは、それは人間の自由の始まりでもあるからである。……存在の当初から人間は反逆者であり、自己のうちに神たるべき可能性をもっている。のちに述べるように、人間が開花すればするほど、ますます神の優越性から自己を解放し、ますます神に等しくなりうるのである。(31頁)

人間は「神の似姿」として創造された。人間にはもともと神となりうる可能性が存在しており、人間が自らの可能性を開花すればするほど神に近づいて行く。エデンの園から追放された人間にも、そのような可能性が開かれているのである。

人間は、人間の最初の自由の行為、つまり反抗し、否を言う自由とともに始まった歴史過程の中で自己を造り上げる。この「墮落」こそ、人間存在の本質をなす。疎外の過程を通ることによってのみ、人間はそれを克服し、新たなる調和に到達することができる。(118頁)

さらに、アダムとエバが結ばれる場面の「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」(2章24節)の中にも、人間の「反抗」と「自由」が見いだされるであろう。

なお、「エデンの園」の物語については、カント「人類の歴史の憶測的な起源」(中山元訳、光文社、2006年；原著1786年)があり、人間の理性と自由の視点から興味深い分析をなしている(70-103頁)。

7. カインとアベル

「カインとアベル」の物語(4章1-16節)も「エデンの園」の物語と同じヤハウエ資料に属しており、ほとんど同じような「追放」をテーマにしている。すなわち、エデンの園から追放されたアダムとエバは、カイン(農業)とアベル(牧畜業)を産む。兄カインは、神が弟アベルの献げ物のほうに目を留めたことに激しく怒り、やがて野原(畑)で弟を襲い殺す。カインに対する神の審判は厳しい。

主は言われた。

「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かっ

て叫んでいる。今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよひ、さすらう者となる。」

カインは主に言った。

「わたしの罪は重すぎて負いきれません。今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよひ、さすらう者となってしまえば、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」

主はカインに言われた。

「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう。」

主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けられた。カインは主の前を去り、エデンの東、ノド（さすらい）の地に住んだ。（創世記4章10-16節）

殺人を犯したカインが自らの罪の重さを嘆き、やがて自分が殺されることに怯える。だが神は、殺人者カインの側に立ちつくす。すなわち、カインを殺す者には必ず復讐することを誓い、カインが殺されないように「しるし」を付ける。神に反抗し、神のタブーを破り、神の選択を怒り、弟を殺害した人間をも、神は決して見捨てることなく見守りつづけているのである。

8. ノアの箱舟

「洪水伝承」は世界中に伝承されており、創世記の起源が『ギルガメシュ叙事詩』や『シュメル語の洪水物語』などメソポタミアの洪水伝承の影響下にあることは間違いないであろう。しかしながら、ヤハウェ信仰の視点から新たに整えられた物語であることも明白である。以下、月本昭男『創世記Ⅰ』

(日本キリスト教団出版局, 1996年)を参照。

「ノアの箱舟」の物語(6章5節-9章17節)は、ヤハウエ資料と祭司資料が複雑に錯綜しながら編集されている。かなり長い物語なので、ここでは最後の「神とノアの和解」の場面のみをとりあげよう。まずヤハウエ資料を引用する。

ノアは主のために祭壇を築いた。そしてすべての清い家畜と清い鳥のうちから取り、焼き尽くす献げ物として祭壇の上にささげた。主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。

「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。

地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも

暑さも寒さも、夏も冬も

昼も夜も、やむことはない。」(創世記8章20-22節)

箱舟から出たノアのなしたことは、「祭壇」を築き、家畜と鳥を屠り、それを焼いた香りを神に届けることであった。動物を裂く・殺す・焼くというノアの残虐な行動が、神の反省をもたらすことになる。洪水によって自らが創造した動物を殺すことになったからだ。だが、人間の悪自体がなくなることはない。「ヤハウエは人間の悪を直視しつつ、その人間の悪を堪え忍びつつ、その意志を創造界に貫く創造の神であり続ける」(月本, 前掲書, 254-255頁)。確かにこれは、「エデンの園」の物語(3章21節)や「カインとアベル」の物語(4章15節)の、どこまでも人間を守ろうとする神の姿と同じであるといえよう。

つづいて祭司資料における神は、ノアと彼の息子たちに、二度と洪水によって滅ぼすことはない約束し、美しい契約の「しるし」を与える。

神は言われた。「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。」(創世記9章12-13節)

神と人間が交わしたこの「契約」の持つ重大な意味を、フロムがたいへん興味深く正しく指摘している。

まさに契約の観念こそ、ユダヤ教の宗教的発展におけるもっとも決定的な段階の一をなすのである。それは、完全な人間の自由、神からさえも自由であるといった思想に道を拓く一段階であった。……契約の締結とともに、神は絶対的支配者であることを止める。神と人間は契約の当事者となった。神は、「専制」君主から「立憲」君主に変わる。神は人間同様、憲法の規定に縛られる。神は恣意的な自由を失い、人間は神自身の約束と、契約に定められた原則にのっとって、神に対抗しうる自由を獲得したのである。……全生物の生存権が第一の規則として打ち立てられ、神でさえもこれを変更することはできない。」

(32-33頁)

「ノアの箱舟」の物語は、人間と自然とのかかわりの中で、人類の未来に対する問題提起をなしている。これに対して、「バベルの塔」の物語(創世記11章1-9節)に登場する神は、ふたたび「横暴な権力者」としてふるまっており、ノアのような救済は見いだせない。あるいは、「バビロン捕囚」の時代にあって、そそり立つ「ジグラット」の崩壊をイメージしていたのであろうか。

* * * * *

創世記のいわゆる「原初史」(創世記1~11章)はここで終わる。「自由」

という視点からこれらの物語をまとめると次のようになるだろう。

「天地創造」の物語には人間の自由はない。神が全権をにぎっており、人間は神に服従するだけである。しかしながら、人間は神の「似姿」であり、神に祝福され、地を従わせ、動物を支配し、植物を食べよと命じられている。いわば人間に「自由」の権限が与えられているのである。

人間は「エデンの園」から追放される。だが、それはキリスト教的な「墮罪」ではなく、人間として自由に生きることへの第一歩なのである。弟を殺したカインもまた、「エデンの東」に住み自由に生きはじめる。神はカインに「しるし」を付けて守護する。

洪水から生き残ったノアが祝福され、神との間で虹の「契約」を結ぶ。契約とは「完全な人間の自由、神からさえも自由であるといった思想に道を拓く一段階」(32頁)なのである。

バビロン捕囚の民にとって、国家権力の象徴としての「バベルの塔」が崩壊し、人々が全地に散っていくという物語は、文字通り自由と解放への希望となったことであろう。

原初史の物語はここで終わる。人間が真実の意味で歴史的に生きる自由は、次の「族長」たちの物語を待たなければならない。

9. アブラハム

創世記12章から、アブラハム・イサク・ヤコブという族長たちの物語がはじまる。11章までの原初史を「神話物語」とすると、一応「歴史物語」と呼びうるであろう。しかしながら、それぞれの生涯を歴史的にたどることはほとんどできない。いつ頃の時代であるかもほとんどわからない。おおよそ紀元前二千年紀の半ばあたりということであろうか。父から子・孫へという系図も、おそらく族長たちから数百年後の歴史家がまとめあげたものであろう。だが創世記の物語には、人間として生きる族長たちの姿がたいへん印象的に描かれている。なお、ヨセフ物語は後世に付加された小説と考えられるので、

残念ながらここでは論じない。まず、アブラハムをとりあげる。引用文中の「アブラム」は改名前のアブラハムのことである。

主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

わたしはあなたを大いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める」

……

アブラムは主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。……

カナン地方に入った。アブラムはその地を通り、シケムの聖所、

モレの榎の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。

主はアブラムに現れて、言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。」

アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。

(創世記12章1 - 7節)

アブラハムのこの「旅」とはいったいどのようなものであったのだろうか。それはたんなる「放浪」や「さすらい」などではなかろう。申命記26章5節に、「わたしの先祖は、滅びゆく一アラム人」と記されている。すなわち、アブラハム一族はまさに絶滅の危機に瀕していたのである。これはいったいどのような状況を示すのであろうか。

アブラハムは「ヘブライ人の祖」とよばれる人物である。そして、「ヘブル(ヘブライ)」の語源の「ハビル(アピル)」という名称は、「前2千年紀の古代オリエントおよびエジプトに現れるある社会階層」を指しており、「移住者、寄留者、社会的保護を必要とする者たち」のことである。そして、「最近では旧約聖書のイスラエル人の祖先ないしヘブル人とハビルあるいはアピルとの間

に何らかの関係があったという見解が有力になりつつある」という（『旧約新約聖書大辞典』教文館、1989年、933頁）。関根正雄も同様の指摘をなしている（『古代イスラエルの思想家』59-60頁）。

これはアブラハムの出発を説明するヒントになるであろう。アブラハムは文字通り「移住者、寄留者」として出発した、いや出発せざるをえなかったであろう。もちろん、ハランの土地では一族が生きていけなくなっていたからであろう。関根正雄が指摘するように、アブラハムは「自分の今までの生活環境から根こそぎされてしまった、そういう不幸な人間」（同書、46頁）だったのである。もしかすると、紀元前二千年紀におこった「セム民族大移動」の具体例の一つであったのかもしれない。アブラハムはまさしく「セムの末裔」である（創世記11章10-26節）。

それにしても、なんと高圧的で一方的な神の命令であろうか。しかも、さらに驚くべきことに、「アブラムは、主の言葉に従って旅立った」（4節）という。では、アブラハムはどこに向かって旅立ったのだろうか。一族の存続をかけて旅立つ族長が、ただ「主の言葉に従って旅立った」はずがない。おそらく、目的地はすではっきりと「カナン」に定められていたにちがいない（5節）。それは古くから「乳と蜜の流れる国」と称されていた地方である。アブラハムは「食糧」を求め、いわば「難民」として、「生存」をかけて、南方の豊かな温暖の地へと出発したのである。

「わたしが示す地に行きなさい」という神の命令は、アブラハムの内面の決断の強さを示すものであろう。アブラハムが故郷と家から離れるという厳しい決断をくだすまで、アブラハムの内面には長く苦しい人間的な葛藤や迷いがどこまでもまとわりついてきたにちがいない。古代人アブラハムは最後まで自分自身と徹底的に格闘し、同時に自らの守護神やハウエとも格闘していたのであろう。そして、自らの判断が最終的にヤハウエの命令に結びついたということなのであろう。それはフロムが言うように、「人間が発達するために必要なことは、人間をその土地や血縁や、あるいはその父や母につなぎとめる原始的紐帯の切断である」（119頁）。

アブラハムはどこまでも神に従順でありながら、神に対して果敢に問いかけ、挑戦し、対決している。自らの内なる神と「対話」しているのである。フロムによれば、「アブラハムの神に対する挑戦は、不従順によってではなく、神が自らの約束と原則をないがしろにすることを責めることによってであった。アブラハムは一個の反逆するプロメテウスではない。彼は要求する権利をもった自由な人間である。そして神は拒否する権利をもたない」(37頁)のである。

たとえば「ソドムの滅亡」(18章16-33節)においても、アブラハムはそのような神との対話をなしている。ソドムの町を滅ぼそうとする天使たちに、正しい者が50人いても町全体を滅ぼすのかと問う。「もし正しい者が50人いれば、町全部を赦そう」と天使が答えると、アブラハムは45人、40人、30人、20人、10人とその数を減らしていく。天使はそのたびごとに、「わたしは滅ぼさない」と答える。これはかなり現代的な神理解と言わねばならない。

一人息子のイサクを殺して神に献げよという神の理不尽な命令(創世記22章3節)について、フロムは次のような説明を加えている。

イサクをささげよという命令は、人間が一切の血縁的束縛から完全に自由でなければならぬということ、つまり、父、母のみならず、もっとも愛する息子からもそうでなければならぬということを意味するのではなかろうか。ただし、「自由」ということはひとがその家族を愛さないということではない。(120頁)

「自由」はそのような「原始的紐帯」からの解放によってはじめて可能となる。フロムは次のように厳しく根本的に問いかけている。

まことに人間は弱くまた無力である。けれども人間は一つの開放的体制であって発達可能であり、ついには自由に到達することができる。人間は原始的な紐帯への固執を打破し、人間に隷属しないためにも、神に服従することが必要なのである。だがしかし、人間の自由という

観念は、人間が神からさえも自由であるというギリギリのところまでおし広げられるであろうか。(103頁)

アブラハムは出発し(4節)、カナンに到着する(5節)。そして、「シケムの聖所、モレの榿の木」でふたたび神がアブラハムに顕現し(6節)、「あなたの子孫にこの土地を与える」(7節)と約束する。「土地」(15章18-21節)と「子孫」(13章14-17節, 15章5節)こそがアブラハムと神との約束である。神が顕現する場所は、「ヘブロンにあるマムレの榿の木のところ」(創世記13章18節)にもある。それらはアブラハム以前からすでに聖なる場所とされ、「榿の木」は神の言葉が降る聖木だったのであろう。アブラハムはそこでもまた主のために「祭壇」を築く。

これらのテキストは、日本の神道的な神理解にも通じるものであろう。大畠清『宗教現象学』(山本書店, 1982年)は、古代イスラエルと古代日本における宗教現象を比較しながら、「人間の求めるもの」と「神の与えるもの」をともに“Heil”と考え、「いのちのちから」に接近しており、たいへん興味深い。さらに、創世記には次のようなきわめて原始的な宗教儀礼も報告されている。

主は言われた。「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのもとに持って来なさい。」アブラムはそれらのものをみな持って来て、真っ二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置いた。ただ、鳥は切り裂かなかった。はげ鷹がこれらの死体をねらって降りて来ると、アブラムは追い払った。

日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。……日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。」

(創世記15章9-18節)

10. ヤコブ

ヤコブもまた祖父アブラハムと同じように、自分の「故郷」と「家」から離脱し、「旅」をした人間である。しかしながら、それはアブラハムのように一族の存亡をかけた旅ではなかった。双子の兄エサウの相続権をだましとったヤコブは、自分を恨んで殺そうとしている兄から逃れるために、遠くハランの伯父のもとへと旅せざるをえなかったのである。まさにだらしのない逃亡の旅にはかならなかつた。もっとも古いヤハウエ資料の部分のみを引用すると次のようになる。有名な「ヤコブのはしご」は後世のエロヒム資料の中に含まれている。

ヤコブはベエル・シェバを立ててハランへ向かった。……見よ、主が傍らに立って言われた。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。……(ヤコブは)その場所をベテル(神の家)と名付けた。」(創世記28章10, 13, 19節)

ベエル・シェバからベテルまで、急いで歩いても3～4日はかかるだろうか。たとえ母親の言いなりになっていたとしても、兄をだましてしまったという罪意識と、兄が自分を追ってくるかもしれないという恐怖心をどうしてもぬぐいきれなかつたにちがいない。生まれてはじめて独りで野宿をし、自問自答をくりかえし一睡もできない夜もあったことだろう。ヤコブの「自由」は逃亡と不安の自由であった。しかしながら、逃亡するそのヤコブに偉大なる祖父アブラハムと同じ約束が、アブラハムと同じように神から突然与えられる。「土地」と「子孫」の約束である。ヤコブはそこを「神の家」と名づける。神はどん底のヤコブと大いなる契約を交わしたのである。

そして、20年余りの時が流れる。多くの子供と財産を与えられたヤコブは、アブラハムが出発したハランから故郷カナンへと帰る決意をする。明日はい

よいよ兄エサウとの再会をはたすという前夜、ヤコブはヤボク川の渡し場ベヌエルに独りで泊まり、次のような「夢」を見る。

ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」「お前の名はなんというのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」

(創世記32章25-29節)

関根正雄が指摘するように、この物語は元来ベヌエルという地に伝わる古い聖所創設伝承であり、それが二次的にヤコブと結びつけられたのであろう。したがって、このテキストの「神」はもともと「川の精」ともいうべきものであったと思われる(『旧約聖書 創世記』岩波文庫、1956年、193頁)。神と人間との闘いは、世界各地に分布している古代の相撲やレスリングやボクシングなどの宗教儀礼とも関連しているのかもしれない。

兄エサウとの再会を直前にして見たこの夢は、殺されるかもしれないという恐怖に怯えていたヤコブの深層心理をありのままに反映しているのであろう。神との闘いはまさに兄エサウの幻影との闘いでもあったのだ。ヤコブはどこまでもしつこく「祝福」を求めつづける。そして、ここでもまた「神」はそのような自己中心的なヤコブを決して見捨てることはない。それどころか驚くべきことに、「イスラエル」という途方もなく輝かしい名前をヤコブに与えるのである。そして、このヤコブから生まれた十二人の子供たちに由来する部族連合が形成され、やがて古代イスラエル王国にいたるのである。

11. モーセ

旧約聖書の「自由」がはじめて歴史的・具体的な形であらわれるのは、モーセが登場してからである。それはエジプト王ラメセス2世（前1292-1225年）の時代であり、紀元前13世紀の中頃あたりに位置づけられるであろう。

エジプト人はそこで、イスラエルの人々の上に強制労働の監督を置き、重労働を課して虐待した。イスラエルの人々はファラオの物資貯蔵の町、ピトムとラメセスを建設した。しかし、虐待されればされるほど彼らは増え広がったので、エジプト人はますますイスラエルの人々を嫌悪し、イスラエルの人々を酷使し、粘土こね、れんが焼き、あらゆる農作業などの重労働によって彼らの生活を脅かした。彼らが従事した労働はいずれも過酷を極めた。（出エジプト記1章11-14節）

モーセの誕生と成長についてはっきりしたことはわからないが、物語としては「王女の子」として宮廷で育てられている（出エジプト記1章1-10節）。モーセの最初の歴史的な報告は、次のような衝撃的な出来事である。

モーセが成人したころのこと、彼は同胞のところへ出て行き、彼らが重労働に服しているのを見た。そして一人のエジプト人が、同胞であるヘブライ人の一人を打っているのを見た。モーセは辺りを見回し、だれもないのを確かめると、そのエジプト人を打ち殺して死体を砂に埋めた。……ファラオはこの事を聞き、モーセを殺そうと尋ね求めたが、モーセはファラオの手を逃れてミディアン地方にたどりつき、とある井戸の傍らに腰を下ろした。（出エジプト記2章11-15節）

「ヘブライ」については、すでにアブラハムの項目で言及した。すなわち、「前2千年紀の古代オリエントおよびエジプトに現れるある社会階層」を指し、「移

住者、寄留者、社会的保護を必要とする者たち」のこと、すなわちかなり強い社会的差別の対象とされていた人々のことである。「前2千年紀」とあるからには、モーセもアブラハムも同じような状況に生きていたのであろう。ちなみに、「男児殺害の命令」（出エジプト記1章15-21節）の段落に含まれている「ヘブライ人の女」（16節、19節）には、明瞭な差別意識がこめられている。やがてモーセはミディアン地で結婚し、子供を持ち、異国の寄留者として暮らしていたという（2章21-23節）。「ミディアン地方」は「パレスチナ南部地域」あるいは「アカバ湾の東側」と推定されている（『旧約新約聖書大辞典』1149頁）。

出エジプト記3章1-10節を要約してみよう。モーセが羊の群れを荒れ野の奥へ追って行くと、「柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない」（2節）。燃える柴の「炎」とは、情熱的なモーセの燃え上がる使命感を表象しているのであらうか。やがて、モーセは柴の炎の間から語りかける「神」の声を聞く。すなわち、「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」（6節）。モーセは自らに顕現した神を父祖たちの神と同一視したのである。そして、エジプトで苦しみ叫んでいる同胞を救い出し、「乳と蜜の流れる土地」（カナン）へと導き上ることこそがモーセの使命となり、イスラエル全体の共通目標となったのである（7-10節）。この「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」という表現は、15節と16節でもくりかえされている。

モーセのまさに奇跡的なエジプト脱出・解放物語の説明はすべて省略せざるをえない。もちろん、その物語のすべてが歴史的出来事であったわけではないし、逆にすべてが作り上げられた虚構でもない。「出エジプト」の感動的な物語は、数百年以上かけて徐々に仕上げられていった文学作品なのだ。だが、たとえそれがどれほど小さな集団であったとしても、モーセに導かれ、エジプトの奴隷状態から解放された人々がいたことだけは、事実として記憶されるべきであらう。それは現在にいたるまで「自由」を求める人々の大いなる「希望」となりうるからである。

エーリッヒ・フロムは、敬虔なユダヤ教徒の家に生まれ、ユダヤ教から大いに学び、やがてユダヤ教から離れて、「徹底したヒューマニズム」を自称し、一貫して人間の「自由」を主張しつづけた。そのフロムの言葉をわれわれの心の奥底にきざみこもうではないか。

エジプトにおける奴隷状態からの解放の物語や、偉大なる人道主義の預言者たちの弁舌が、つねに権力による苦しみを経験し、自らは決して権力を行使しなかった人々の心に反響を呼び起したことは、当然ではなかったか。一つになった平和な全人類、貧しきもの、弱きものへの正義といった預言者のまほろしが、ユダヤ人の間に豊かにみのり、決して忘れ去られなかったのは、驚きであろうか。ユダヤ人社会の閉鎖的な壁が崩れたとき、とりわけ多くのユダヤ人が、国際主義と平和と正義の理想を唱える人々の群に身を投じたということは、不思議であろうか。この世的な見方からすればユダヤ人の悲劇とも思われること、つまりその国土と国家を失ったということも、ヒューマニズムの視点からすれば、彼らの最大の祝福であった。悩めるもの辱められるものと共にあって、彼らはヒューマニズムの伝統を維持し発展させることができたのである。(21-22頁)

【付記】

旧約聖書には紀元前15世紀頃から千数百年間にわたる歴史と人間の壮大な物語（ドラマ・ロマン・夢）が描かれており、それを母体としてユダヤ教、キリスト教、イスラム教が生みだされた。近代ヨーロッパの根底にはそれらの伝統が濃厚に浸透している。近代とはその伝統から「自由」になろうとした時代であり、自らが置かれていた思想や組織と批判的（学問的）に対峙せざるをえなかった時代であったのだろう。

敬虔なユダヤ教徒の家庭に生まれ、やがてユダヤ教から離れながらも、ユ

旧約聖書における自由

ダヤ教から大いに学びつづけたエーリッヒ・フロムは、「自由」という独自の視点から旧約聖書を読みなおそうと試みた。それは“hic et nunc”（ここ・今）を生き抜こうと努力する人間に、きわめて新鮮で希望に満ちた指針となるにちがいない。「ユダヤ主義」でもなく、「反ユダヤ主義」でもない、新しい可能性が開かれてくるにちがいない。

われわれの「自由と愛の精神」を明確化するには、遥かな旅路をたどらなければならないのであろう。